



宇和島から世界へ、 未来への想いをのせる

宇和島出身の25歳が生み出した新記録



宇和島から生まれた日本新記録に、 日本中が沸いた

日本で誰も到達していない、
2時間4分台の世界へ

鈴木さんは、本市出身の日本を代表する陸上競技長距離選手です。宇和島東高校在学中に全国駅伝大会へ出場し、神奈川大学進学後も着実に練習を積み重ねてきました。東京オリンピックの出場権をかけて令和元年9月に行われたマラソンブランドチャンピオンシップ(MGC)にも出場しました。

はいませんでした。その壁を鈴木さんが打ち破り、2時間4分56秒の日本新記録で優勝を飾りました。ゴールシーンで手をあげた様子はまさに、宇和島から世界へ羽ばたいた瞬間となり、宇和島はもちろん、日本中がその記録誕生に歓喜しました。

パリ五輪という
次なる目標に向けて

日本記録誕生後、3月8日(月)に、市役所で「宇和島大賞・宇和島栄誉賞」の授賞式が行われました。式の中で鈴木さんは、「優勝は狙っていたものの日本記録が出るとは考えていなかった。大会終了後に、地元宇和島の皆さんから祝福の連絡をたくさんいただいた。これからも明るいニュースを届けられるように、頑張っていきたい。東京オリンピックの選考会では、出場権を掴むことができず悔しい経験をした。その悔しさをバネに、次のパリ五輪では絶対に出場権を掴んでやろうという目標になった。陸上を始めるきっかけを作ってくれた父や料理などで支えてくれた家族には感謝したい。しばらくは体を休めて、また練習に励みたい」と話してくれました。

鈴木 健吾 (25)

宇和島東高校卒業。神奈川大学に進学し、3年生のときに箱根駅伝2区で歴代8位の好走で区間賞を獲得し、注目を集める。大学卒業後は富士通に所属。今や日本を代表する陸上競技長距離選手となった。

写真提供：富士通株式会社

宇和島出身者という身近な存在が生み出した日本新記録。この結果は、宇和島に住む私たちに、宇和島からでも世界へ挑戦していくという勇気と誇りを与えてくれました。



「宇和島大賞・栄誉賞授賞式」で、市長や家族と大会を振り返り、応援への感謝や今後の抱負を語った。

日本のマラソン発祥は 宇和島かもしれない？

「宇和島健歩」とは

伊達宗城の伝記「藍山公記」(全181巻)中53巻(公財)宇和島伊達文化保存会蔵)に記されている1854年、宇和島藩8代藩主伊達宗城の命によって開催された遠乗と遠走。その「藍山公記」の中で、この遠走のことを「健歩」と称していることが市内在住の橋本増洋さんにより発見されました。その健歩について読み解いていくと、今で言うマラソンのようなものであることがわかります。

現在、日本のマラソン発祥と言われているものは江戸時代の1855年に安中藩(現在の群馬県安中市)が行った「安政遠足」とされていますが、それよりも前に行われていたと記録されていたのです。

それ以前にも、「明和二年家中由緒書」(公財)宇和島伊達文化保存会蔵)に宝暦9(1759)年に梶谷左佐が、9月4日に上畑地、その2日後に西予市宇和町東多田

へ遠走を命じられ、いずれも達者にこなし木綿3反が褒美として与えられたと記録されています。このように、宇和島では昔からマラソンが行われていたことがわかりました。今回は、この「健歩」と「マラソン」について伝えたいと思います。



【橋本増洋 編書「宇和島健歩・燼余」(改定)】

「健歩」と「マラソン」の比較 違うところ

■競技の違い

今のようには距離の定めはなく、目的地へ向かって藩主および近臣の者は乗馬して走行し、同じ距離を御徒(歩兵)や足軽は走ります。現在はスポーツとして行われていますが、昔は戦に備えるための体を鍛えるものとして行われていたようです。

■服装の違い

もちろん今のようなTシャツやハーフパンツにランニングシューズのような服装ではなく、遠乗の藩主宗城は、筒袖(袂がなくして全体を筒形に仕立てた袖)羽織に小袴(裾に細いへりをとった野袴)を着用して、太刀を佩く姿であり、近臣の者たちもこれに準じていました。また、走者は鉢巻を締め、タスキを掛け一刀を携えて駆け抜けたと記されており、現在のマラソンに通ずるものもあります。

似ているところ

■順位と賞品

早く到着した人には、現在と同じように賞品(褒美)があり、扇子などが贈られ、後日参加者には、宴が催されました。また、各自に腰印を持たせて代官所や番所で到着時間を記録させました。

■サポート体制

健歩において、参加者は弁当や給水、医師まで準備され、現在のマラソンのような一面もあつたことが記されています。また、紛らわしい分かれ道のようなどころには案内人を配置することや馬の気付け薬(気を失い、倒れそうときに嗅がせて意識をはっきりさせる薬)まで用意していたそうです。

「宇和島健歩」のコース

橋本さんの著書「宇和島健歩・^{もえぎ}燼余」で「宇和島健歩」概略の中に記載されている2つの健歩について紹介します。

榎谷遠馬・健歩

旧暦の2月14日（現在でいうところの3月ごろ）の午前10時ごろ開始しました。参加者は約20人で、屋敷を出発して鬼北町水分経由で

松野町松丸を通り、榎谷番所（現松野町富岡）へ向かったとされています。おおよその地点を地図上に入れると、距離にして約21.3kmでハーフマラソンとほぼ同じ距離です。帰りは三間町経由で、約26.2kmとなり、合計ではフルマラソンの距離を超える約47.5kmを走ったことが分かります。

2月23日にも八幡浜代官所（現八幡浜市内）、東多田番所（現西予

市宇和東多田）までの健歩が行われ、「八幡浜走行」の参加者は足軽38人。距離は36.2km以上、「東多田走行」は足軽51人。距離は28.1km以上にもなります。

今回「宇和島健歩」の取材を進めていくにつれて本市には昔からマラソンについて、不思議な縁があつたのではないかと感じました。本市出身である鈴木健吾選手が日本新記録を打ち立てたこともその想像をより豊かにさせてくれます。

これからさらに研究が進み、「宇和島健歩」が日本のマラソン発祥とすることになれば、鈴木選手の出身地としても日本の歴史としても、本市はさらに広く日本中に知れ渡っていくこととなります。

同時に、マラソンの文化が宇和島市にも少しずつ広まり、「宇和島健歩」という名前が皆さんから発信される日が来るかもしれません。



当時は甲冑を着て夜間の歩行訓練も行っていた。